～“I Learn THAT from Dr. Martin Luther King”：「長い公民権運動論」が示唆するマイノリティの授業化の視点～

鶴見高校　**徳原　拓哉**

1　問題設定

2016年のスーパーボウルにおいて、黒人シンガーソングライターのビヨンセが幕間に“Formation”のダンスパフォーマンス行うと、保守派から強烈なバックラッシュが起きた。曰く、それは「過激で暴力的な」ブラック・パワー・ムーヴメント（Black Power Movement, BPM）ないしブラック・パンサー党（Black Panther Party, BPP）を想起させるとの批判であった。

オバマの時代が終わりを迎えた2016年に、BPM、BPPという歴史的記憶をてことして、人種をめぐる言説が再び問題になったのである。アメリカ黒人の物語は、高校の歴史の授業において、最初は奴隷化された客体として、次にはキングという”ヒーロー”に率いられた運動として語られる。そしてマーティン・ルーサー・キングJr.が語った「夢」は、バラク・オバマの登場によって結実する。

さて、アメリカ黒人の歴史を語るときに、教科書記述をたどるならば、そこに登場するのは奴隷という「悲劇」と、キングという「夢」と「愛」、そしてオバマという「変化」である。特に公民権運動という「非暴力」の記憶は、「良い記憶」として語られ、対比されるのがこの過激で暴力的なBPMであった。

しかしながら、このように対比された形で語られる歴史は、マジョリティにとって耳触りの良い形でしかマイノリティの運動を取り上げることはなく、「良き」マイノリティを称揚することによって、それ以外の人々の声に「過激」という烙印を押す。逆に、公民権運動は実際には暴力に彩られた運動だと述べたところで、それは「暴力-非暴力」の構図をただ逆転したに過ぎない。

それは歴史を切断し、ひいては神話化することに他ならない。本報告では、戯画化された公民権運動の語りを再考し、高校の教育現場でどのような「語り」がありうるのか検討したい。

2　公民権運動史研究の整理

従来の公民権運動史を考える際に、主に４つの波からこれを整理する。１つ目は70年代、公民権運動とそれまでの運動を比較し、運動の独自性や特殊性を指摘した研究群である。

そこでは運動が全国規模で起きたことが重要視され、キングら個々の英雄的な個人の活躍による「トップダウン」での社会の変化を重視した「語り」であった。

この見方では運動の成功を、キング個人のカリスマや白人政治家・北部白人活動家の援助、南部での人種間暴力がテレビで取り上げられたことによって白人リベラルの同情を誘ったことに帰する。

80年代になると、Aldon D.MorrisやClayborne Carsonに代表される研究が登場した。公民権運動の成功には、より以前の1930年代までに存在していた黒人の社会的なネットワークと組織の影響を指摘する研究群である。これらの研究によって、黒人そのものの主体性がより強調されることとなった。

これらの研究ではローカルな草の根の人々の運動とナショナルな運動とのインタラクティヴな影響を重視されており、社会史的な要素が強い。

Maning Marableらが90年代に台頭してくると、公民権運動論は、アメリカ社会の経済的な成長、冷戦にともなう社会的な構造の変化といった、より長期的かつ多元的な構造的要因を運動の「起源」として注目を置いた。

4つ目の波として現在考えられねばならいのが、「長い公民権運動」論である。Jacquelyn Dowd HallやPeniel E. Josephに代表され、以下に特徴をまとめる。

①　：公民権運動とブラック・パワー運動の二分法的な理解を脱構築すること。
②　：ジェンダーの観点からの公民権運動史の「語り」の再構築をすること。
③：「公民権ユニオニズム」論の登場：公民権運動論と40年代のフォード社内の労働運動を一体のものとして理解すること。
④　：アメリカ国内の黒人運動と海外の汎アフリカ運動、反植民地運動との直接的・イデオロギー的な相互影響を積極的に評価すること。

3　従来の公民権運動の「語り」と長い公民権運動論を踏まえた「語り」

従来、公民権運動を語る際には、モントゴメリー・バスボイコット事件が重要な画期をなす。この事件の語りを引きあいにして、公民権運動における「非暴力」について考える。

典型的な、モントゴメリーバスボイコット事件は次のような「語り」である。

「公民権運動史の理解のなかで、1955年12月1日のローザ・パークスの逮捕を直接的契機とし、1年以上にわたるボイコットを経て市バスにおける人種隔離撤廃を勝ち取ったモントゴメリー・バスボイコット運動が占める位置は極めて大きい。何はともあれ、アメリカ黒人の運動は、このボイコット運動を通じて、マーティン・ルーサー・キングという稀代の「指導者」を得た。」[M. Vardaman, 2007]

このモントゴメリー・バスボイコット事件が公民権運動史において重要な位置を占めていたのは、「ボイコット」という「非暴力」的な手段を用いて、1年以上という長きに渡る「苦難に耐え」たという「非暴力の勝利」の象徴であったためであった。現在においても、この運動が、法廷闘争中心であった公民権運動から大衆運動を中心とした運動への質的な変化をもたらしたことは、研究史上のコンセンサスを得ていると言って良い。

このような「非暴力・不服従」運動としての公民権運動の「語り」は、現在その「暴力」性を巡って見直しが進んでいる。[藤永,2014]によれば、実際にこのボイコット運動において市当局を動かしたのは、1956年の連邦最高裁判決であって、その現実以上に非暴力という闘争手段がことさらに称揚されていることに着目すべきであるという。そして、この非暴力の神話化は当時の黒人たちがすでに感じていたものであった。

BPMを代表するスポークスマンの一人であり、公民権運動ではシット・イン活動など大衆運動の急先鋒を担った学生非暴力調整委員会（Student Nonviolent Coordinating Committee, SNCC)の議長であったストークリー・カーマイケルは、以下のように語っている。

数週間前、この国に帰国してすぐ、わたしはマーティン・ルーサー・キング博士に関する記録映画を観たのですが、強く驚愕せざるを得ませんでした。ミシシッピのブラック・パワー行進がまったく取り上げられていなかったのです。誰がこの映画を製作したのか、確実なところはわかりませんが、こう言わなくてはいけないでしょう。歴史の力にいちゃもんつけるんじゃない。（中略）ミシシッピのブラック・パワー行進は、この国に住む黒人たちの生活の重要なファクターとなっている。この事実を閑却するのは、歴史の力に手出ししようとしているに等しい。歴史の力に手出しするならば、その力そのものによって滅ぼされることになる。これが事実なのだ。本来そうではなかったものにキング博士を描こうとすることを、許すことはできない。キング博士はわれわれに多くのことを教えてくれました。彼が教示したことを理 解し、それを受け容れなくてはなりません。彼が伝えたのは対決の方法なのです。マルコム X でもなければ、ブラック・パンサー党でもなく、キング博士がそれを教えてくれたのです。そう、キング博士が。彼の戦術は非暴力でしたが、教えてくれたのは対決する方法なのであり、それを身でもって示してくれたのです。[藤永,2014]

ここでカーマイケルが述べているのは、1966年、ジェイムズ・メレディスという黒人青年が「恐怖に抗う行進」として、テネシー州メンフィスからミシシッピ州ジャクソンまで行進を計画し、行進を始めて2日目、ミシシッピ州境から１６マイルの地点で待ち伏せていた白人から散弾銃によって狙撃され、病院に担ぎ込まれた事件である。

カーマイケルがこの事件を取り上げることには理由がある。メレディスが狙撃された際に、当初は保守系の黒人団体である全米黒人地位向上協会（National Association for the Advancement of Colored People, NAACP）や、キングが主導する南部キリスト教指導者会議（SCLC）、人種平等評議会（Core）が行進の継承を申し出ていたが、カーマイケルが主導するSNCCがこれに参加しブラック・パワー的なスポークスを声明に入れることを主張すると、NAACPが行進から離脱したのである。

この時注意すべきは、キングは保守的な公民権指導層がBPMに批判的な目を向けた時にあっても常に彼らのそばにあったことであり、カーマイケルのこの演説は、そうした事実と剥離して、キングの暗殺後すでに、その偶像化が始まっていたことへの警鐘に他ならないという。

さらに言えば、キング自身の非暴力主義は、インドで先行していた非暴力主義的な「敵の改心」を目的とし、人間の善性を強調するような「絶対的パシフィズム」ではなく、キング研究の第一人者で歴史研究者のデイヴィッド・ギャロー、社会学者のアルドン・モリス、政治学者のマイケル・クラーマンらも指摘しているように、「非暴力的挑発 nonviolent provocation」や「非暴力的対決 nonviolent confrontation」と呼ぶのがふさわしいものだった。

そのように考えると、BPMは公民権運動と剥離したものではなく、むしろ一体のものとして捉えるべき可能性が生まれる。次節では、BPMの実像を概観したい。

4　ブラック・パワーの形成とSNCC

ブラック・パワーの台頭を捉える上で、考えなければならないアクターは上にあげたSNCCである。ブラック・パワーの中心人物であったストークリー・カーマイケルの思想は、このSNCCの活動の中で培われたものに他ならない。

このSNCCは、1960年、NAACPヴァージニア州ボルティモア支部の専従活動エラ・ベイカー(Ella Baker) の

指導の下、ノース・カロライナ州ショウ大学で組織された学生団体であった。
ベイカーは30年代からの活動家であり、男性中心的なNAACPに対して懐疑的であった。その折に、モントゴメリー・バスボイコット事件が起きると、NAACPのような全国組織ではなく、ローカルなリソースを中心に運動が展開されたことに強いに関心を寄せるようになった。キングがSCLCを組織すると自身も所属したが、そこでも女性であるだけでお茶くみに回すなどの状態に失望し、学生のシットイン運動に支援を行うようになった。
彼女の指導の下でSNCCは組織化され、公民権運動団体の中でも、シット・イン運動やジェイルイン運動を担い、フリーダムライド運動を主導したCOREと共に公民権運動の最前線を担う団体になった。
シット・インの大きな特徴は、非暴力直接行動である。ボイコットでは、人種隔離の現場から離れることによって、反対の意思を表明したが、シット・イン運動はあえて人種隔離が行われている場所を選び、「突撃」していく。「非暴力」を「武器」として行使する直接対決的な運動である。赤狩りの中で停滞していたNAACPを中心とする公民権運動を新たな局面へ導いたのである。
しかしその後、非暴力不服従を戦術としていた公民権運動は隘路にはまる。1961年のオールバニー闘争でそれは明らかになった。それまでの非暴力不服従は、係争のあえて強い場所を選び乗り込むことで、白人側の強烈なヘイトを意図的に引き起こして衝突し、メディア戦略によって連邦政府を巻き込むという戦略的非暴力主義であった。しかし、オールバニーでは官憲は徹底的に衝突を回避したため連邦の権限がかかわる係争点を欠き、成果が上がらなかったのである。
こうした結果は、特にSNCC内部に非暴力主義の効果に対する疑念を抱かせることになった。この黒人内部のラディカルズとリベラルズとの不和は、60年代の公民権運動の潮流に常に2つの流れとして存在しており、そのどちらかを取り上げてことさらに強調することは公民権運動の実像から離れることになる。
そして、1966年、メレディスの狙撃を受けて行われた「恐怖の行進」のクライマックス、グリーンウッドという町でカーマイケルと数人のSNCCメンバーが一時逮捕された。その後保釈されたカーマイケルはマイクを握ると「オレが逮捕されたのはこれで27回目だ。もう留置場に行く気はない。もう留置場には行かないぞ！」と叫び、"We want black power!"と数度叫んだ。聴衆もそれに応え黒人教会でのコールアンドレスポンスさながらに、"ブラック・パワー"の合唱が起きた。
つまり、「ブラック・パワー」という言葉そのものは、生まれた当初から明確な意味を持っていたのではなく、現場の混乱とそして公民権運動の網の目からこぼれ落ちた掬いきれぬ叫びそのものであった。

5：そしてブラック・パンサー党へ-「戦闘的」という表象

前節で、公民権運動とBPMとが車の両輪として展開してきたことを確認した。しかしながら、通俗的に思い描かれるBPMとは、冒頭でビヨンセが受けたバッシングのように"黒いレザージャケットに身を包み"、"髪をナチュラルなままにし"、"ベレー帽をかぶった"、ブラック・パンサー党の姿と結びついている。
ブラック・パンサー党は正式名称を、「自衛のためのブラック・パンサー党(Black Panther Party for Self-Defense, BPP)」と呼ぶ。1966年にカリフォルニア州オークランドの学生であったヒューイ・P・ニュートンとボビー・シールによって結成された集団であり、特に北部都市でBPMを牽引する集団であった。
BPMの潮流は、南部においてはSNCCが担っていたが、彼らは北部都市においてその存在感をBPPに譲っていた。これは、SNCCが主にシット・イン運動や草の根の有権者登録運動を展開していたのに対して、北部都市では警官暴力(Police Brutality)というより現実に即した喫緊の問題があったからである。BPPは自警団を組織して、警官暴力を監視するコミュニティ・パトロールを行い、1967年5月、カリフォルニア州国会議事堂でレーガン知事が会見をしている際に、武装したパンサー党員がデモンストレーションを行なったことで一躍その名前と、"武装した黒人"という表象が広がった。
結果として、BPPの表象イメージはBPMと結節し、そして現在に至るまでそのイメージは固着したままである。しかしながら、BPPの武装した表象とその実態には質的な違いがある。このデモンストレーションの直後、カリフォルニア州では武器の携帯が困難になりパトロール活動は停止し、BPPの活動は変化していった。キングの暗殺に衝撃を受けたクリーヴァーらの初期指導者層が警官を襲撃し逮捕され、BPPの運営から退いたのもその変化に拍車をかけた。
この後のBPPの活動は、子どもたちへの無料の食事配給や、無料のクリニックといった、インナーシティのコミュニティを支える活動であった。また、BPPは国内の貧困問題、黒人への抑圧を第3世界での反植民地活動に結びつけ、南アフリカのアフリカ民族会議(African National Congress, ANC)などと連帯を深めていくことになる。BPPの党勢の拡大は、むしろ前述した「戦闘的」なパブリック・イメージとは裏腹に、その「戦闘性」の欠如の中で起きており、その黒人という人種を超えたマイノリティの連帯は、1980年代に大統領へ立候補するジェシー・ジャクソンの「虹の連合」を準備していくこととなった。長い公民権運動論を踏まえるならば、こうした諸々のアクターがせめぎ合う中から、総体としての「公民権運動」という現象が立ち現れてくるそのダイナミズムを捉えたい。

おわりに-公民権運動史の視点が授業づくりに与える示唆

本校で用いている帝国書院版の世界史Bの教科書を覗いてみると、公民権運動については

1960 年代のアメリカ国内では、教育・就職などで黒人差別が続き、経済繁栄の裏で社会の分裂が進行していた。大統領ケネディ（民主党）は、キューバ危機後、白人中心の富裕層と黒人中心の貧困層という分裂状況を改善するため、大統領選挙のスローガンだった「ニューフロンティア」政策を実施した。ケネディは 1963 年に暗殺されたが、後継の大統領ジョンソン（民主党）も、「偉大な社会」計画を提唱してケネディの社会改革路線を継承した。黒人指導者キング牧師らの黒人差別撤廃運動（公民権運動）の拡大もあって、翌 64 年、人種・性・宗教・出身国による差別を禁止する公民権（市民権）法が成立した。

とある。さてここに見えるのは、ケネディとジャクソン、そしてキングという 3 人のヒーローたちによる社会改良であり、まさしくそれは白と黒に分断された社会の統合という夢である。“キング牧師らの黒人差別撤廃運動”すらも、ケネディやジョンソンの偉大な計画の中になければその効力を持たないのである。これは、オバマという黒人大統領が、大統領選のキャンペーンを通じて、そしてその大統領の任期中を通じて、常に自らの黒人性を脱色し、カラー・ブラインドな語りに腐心していたことを思い起こさせる。

オバマの登場によってキングの夢が実現したとして、その夢のあとに残った現実はどうだっただろうか。賃金や就業格差はいまだに厳然として存在しているし、警官暴力の問題は現代アメリカ黒人にとってもなんらかわっていない。オバマが意識的に、自らについてカラー・ブラインドに語らなければならないという現実そのものが、彼が否応なく黒人であるということを突き付ける。人種という桎梏と権力勾配はいまだアメリカ社会に根深く、とすれば「中立に語る」、「フラットに語る」という歴史語りによって我々が何に加担をするのか、マイノリティの歴史は私たちに突き付けてくる。

> 朝起きても何も変わってないことに気づいて/自分に尋ねたんだ/この人生を遂げる価値はあるのか /自爆したほうがいいんじゃないか/もう貧乏でいることにうんざりなんだ/更に最悪なのが/俺は黒人だ/（中略）警察は黒人ばかりを気にして/銃を発射して黒人を一人殺せばやつはヒーローになれる/（中略）決して変わらない何かがあるんだ/（2PAC「Changes」）

90 年代を駆け抜けた早逝の Hip・Hop アーティスト、2PAC は歌った。キングが“The Change gonna come”と述べ、オバマがその就任演説で“The Change has come”と受け答えたところで、物語は終わったのだろうか。何が変わったのか、何が変わらないのか、歴史教員としての私たちは何を見るのか。

≪参考文献≫

AlexanderMichelle. (2010). *The New Jim Crow: Mass Incarceration in the Age of Colorblindness.* HV.

BloomM. Jack. (1987). *Race, Class, and the Civil Rights Movement* . Bloomineton.

CarsonClayborne. (1981). *In Struggle: SNCC and the Black Awakening of the 1960s.* Cambridge: HarvardUniversity Press.

Cha-JuaKeitaSundiata, LangClarence. (2007). “The "Long Movement"as Vampire: Temporal and Spatial Fallaciesin Recent Black Freedom Studies” . *The Journal of American History.*

CobbE. Jr. Charles. (2015). *This Nonviolent Stuff'll Get You Killed: How Guns Made the Civil Rights MovementPossible.* Duke University Press.

DysonEricMichael. (2000). *I May Not Get There with You: The True Martin Luther King, Jr.* Free Press.

E. JosephPeniel. (2006). “The Black Power Movement : Rethinking the Civil Rights-Black Power Era New York:Routledge.” *Journal of American History.*

E. JosephPeniel. (2006). *Waiting Till the Midnight Hour: A Narrative History of Black Power in America.*

F. LowsonSteven. (2005). “Freedom Then, Freedom Now: the Historiography of the Civil Rights Movement.” *American Historical Review.*

HallDowdJacquelyn. (2005). "The Long Civil Rights Movement and the Political Uses of the Past". *TheJournal of American History Vol. 91,* Issue4. JAH.

KelleyD. G. Robin. (2002). "Stormy Weather: Reconsidering Black (Inter)Nationalism in the Cold War Era". Eddie S. GlaudeJr., *Is It Nation Time?: Contemporary Essays on Black Power and Black Nationalism.* Chicago: IL.

LichtensteinKorstad and NelsonRobert. (1988). "Opportunities Found and Lost: Labor, Radicals, and the EarlyCivil Rights Movement". : *Journal of American History* 75.

M. VardamanJames. (2007). 『黒人差別とアメリカ公民権運動:名もなき人々の戦いの記憶』. 集英社新書.

MarableManning. (1987). *Race, Reform and Rebellion: The Second Reconstruction in Black America, 1945-1990. Jackson.*